

普及指導情報

「大雨に伴う浸水・冠水被害に関する農業技術対策について」

(第30号)

令和7年8月12日

佐賀県農業技術防除センター

(表題) 大雨に伴う浸水・冠水被害に関する農業技術対策について

(担当) 農業技術防除センター 専門技術部

- 九州北部地方（山口県を含む）では、9日から11日にかけて停滞した前線の影響により、線状降水帯が発生し、非常に激しい雨が降りました。
- また、12日も前線が対馬海峡に停滞しており、佐賀県では12日昼過ぎから夕方にかけて局地的に雷を伴った激しい雨が降るおそれがあります。
- これまでの大雨で地盤が緩んでいる所があり、少しの雨でも土砂災害が発生するおそれがあります。
- 農地、園芸施設への浸水・冠水がみられた圃場では、農作物等への被害が懸念されます。別紙のとおり技術対策をまとめましたので、業務の参考にしてください。

【参考データ】

●大雨と落雷及び突風に関する佐賀県気象情報 第19号

2025年8月12日5時35分 佐賀地方気象台発表

<雨の実況>

- ・ 降り始め（9日3時）から12日5時までの降水量（アメダスによる速報値）

鳥栖	306ミリ
佐賀空港	213ミリ
嬉野	200ミリ

<雨の予想>

- ・ 12日に予想される1時間降水量は、多い所で30ミリ
- ・ 12日6時から13日6時までに予想される24時間降水量は、多い所で60ミリ

<満潮時刻>

- ・ 大浦港 12日 10時59分 23時27分

<防災事項>

- ・ 土砂災害に警戒してください。
- ・ また、落雷や竜巻などの激しい突風に注意してください。
- ・ 発達した積乱雲の近づく兆しがある場合には、建物内に移動するなど、安全確保に努めてください。

佐賀県農業技術防除センター

I. 水 稻

1. 生育状況

- (1) 早期水稻 : 黄熟期～収穫期
- (2) 山間早植え水稻 : 出穂期～乳熟期
- (3) 普通期水稻 : 幼穂形成期～穂ばらみ期

2. 今後の対策

(1) 早期水稻

- ①まもなく収穫を迎えることから、倒伏や刈り遅れによる品質低下（収穫遅延に伴う穂発芽）等が懸念される。倒伏程度の大きい場合は、荷受け区分等を確実に実施して、全体の品質劣化につながらないよう共乾単位で仕分けを徹底する。
- ②天候回復後、速やかに圃場内の排水（排水路の整備等）を促す。特に排水不良な圃場等は、表層排水を促すよう明渠を整備する

(2) 山間早植え水稻

- ①間断灌水を行い、根の活力維持に努める。また、現在の圃場の地耐力が不十分（土壌が軟弱）な場合は、落水期間を長く取って稲の支持力を高める。
- ②天候回復後、速やかに圃場内の排水（排水路の整備等）を促し、収穫に備える。

(3) 普通期水稻

- ①幼穂形成期以降は、出穂期まで最も多くの酸素を消費する時期である。このため冠水を受けた圃場では圃場内の排水を促す。また、圃場用水の交換を行い、根の機能維持に努める。
- ②中干しが不十分な圃場では、倒伏防止のために落水期間をやや長めにした間断灌水を行い、徐々に地を固めるようにする。
- ③中晩生品種の穂肥等の施用は、草姿や病虫害の発生状況を考慮しながら実施する。

(4) 共通事項

- ①いもち病の常発地域の一部の圃場や直播圃場では、穂いもちの発生が懸念されるため、穂ばらみ期や穂揃期の防除を徹底する。
- ②過繁茂状態や受光体勢が乱れている圃場では、紋枯病やウンカ等が発生しやすいため、圃場の見回りを行い、防除時には薬剤が株元まで届くよう入念な薬剤散布に努める。
- ③白葉枯病が発生した場合は、伝染拡大を防ぐため葉が乾くまで発病株の周辺に入らない。

II. 大 豆

1. 生育状況

- (1) 本年の播種は天候に恵まれ、7月上～下旬に播種された圃場が多かったが、出芽前後の乾燥により生育は遅れている。現在、7月上旬播種で9～10葉期、7月中旬播種で6～8葉期、7月下旬播種で3～5葉期前後となっている。

2. 今後の対策

- (1) 長時間の滞水は根の退化を招き、水分ストレスの影響を受けやすくなることから、圃場

から速やかに雨水が退水するよう排水路の整備を行い、排水に努める。

（コルゲート管を閉栓している圃場では、圃場内の排水状況に応じて開栓も検討する。）

- (2) 排水完了後は、今後の干ばつや大雨等の水分ストレスに耐えうるよう速やかに培土を実施し、胚軸からの新根発生（不定根）を促して生育を確保する。

（コルゲート管を開栓したところでは閉栓する。）

- (3) なお、培土作業は、日中高温時は避け、大豆の開花前までに終了させる。

- (4) 病虫害の発生に注意し、適期防除により莢数、粒数の確保に努める。なお、近年ハスモンヨトウなどの鱗翅目害虫やカメムシ類が多い状況であることから、本虫の発生に留意し、適期および適正な防除に努める。

Ⅲ. 野 菜

1. 生育状況

- (1) 施設野菜（イチゴ、キュウリ、ナス、トマト等）

①促成イチゴは、次作に向けた育苗期である。

②促成イチゴ・ナス・キュウリ・トマトは、次作に向けた土壌消毒・土作り期間である。
一部農家で、早い抑制作型や雨除け夏秋作型が栽培されている。

- (2) 雨よけ野菜（アスパラガス、コネギ等）

①アスパラガスは、高温の影響による草勢低下により細物や開き・曲がりが増加している圃場が多くみられる。

②コネギとハウレンソウは、播種時期の違いにより生育ステージはさまざまである。

- (3) 露地野菜（タマネギ、夏秋ナス、キャベツ等）

①春どりタマネギは播種床の準備中、冬どりタマネギは定植の準備中である。

②夏秋ナス、夏秋ピーマンは収穫期である。

③キャベツ、ブロッコリー等は育苗、定植期である。

④カンショ（サツマイモ）は、肥大期である。

2. 今後の対策

- (1) 共通

①急激に天候が回復した場合、萎凋や葉枯れ症の発生が予想されるため、ハウス換気を十分に行い、強い萎れを生じる際には寒冷紗等で被覆して蒸散抑制と日焼け防止を行う。

②栽培中の果菜類では、浸水した果実は病害の発生源となりやすいため、早急に除去する。
また、草勢回復のために収穫可能な果実は収穫し、着果負担を軽減する。

③降雨による土砂のはね上がりや茎葉の傷み、また土壌水分過多等は病害の発生を助長しやすいので、水が引き、天候が回復次第、低濃度の殺菌剤を十分量散布する。浸冠水で茎葉に付着した汚泥は、清水や濃度の薄い農薬等で洗い流す。ただし、高温時の薬剤散布は避ける。また、畦表面の中耕や育苗ポット表面へ沈積した汚泥の除去を早急に行う。

④浸冠水により土壌養分が流亡していると考えられるため、追肥や葉面散布剤の散布を行って肥効の低下を防ぐ。浸冠水していない露地栽培の野菜も同様（多雨の影響）。

⑤マルチを被覆している畦が浸冠水した場合、マルチ下が土壌水分過多となりやすいので、

天候が回復した後、マルチを畦肩まで上げて畦の乾燥を促す。

⑥育苗中のものは株間を十分に取り、通風をよくして徒長を防止する

(2) 施設野菜（イチゴ、キュウリ、ナス、トマト等）

①イチゴ育苗床が滞水している場合は、直ちに強制排水を行う。

②イチゴの親株・子苗は、雨滴による立枯性病害の二次感染が予想されるので、罹病株は早期に除去（育苗圃場外へ搬出する）するとともに薬剤防除を行う。

③本圃ハウス周囲まで滞水している圃場では、早急に強制排水を図る。

④太陽熱土壤消毒中に浸冠水したハウスは、地温の低下による消毒効果の低下が懸念されるので、消毒期間を延長する。

⑤薬剤による土壤消毒中に浸冠水したハウスは、効果の低下が懸念されるのでビニルを被覆したまま消毒期間を延長し、地温上昇による消毒効果を期待する。

(3) 雨よけ野菜（アスパラガス、コネギ等）

①アスパラガス

- ・排水後は病害予防のため早急に殺菌剤散布を行う。また、出荷できない奇形等の萌芽若茎は随時切除し、株の負担を軽減する。
- ・天候回復後の萎れや株の消耗を軽減するため、ハウス換気を徹底するとともに、寒冷紗被覆等による萎れ軽減対策を行う。
- ・親茎が維持できる場合にはそのまま栽培を続け、必要があれば追加立茎を行って葉面積を確保する。親茎が黄化・枯死する場合には、新たに立茎を行い、親茎と入れ替える。

②コネギ、ハウレンソウ

- ・浸冠水被害で収穫できなくなった場合には再播種を行う。

(4) 露地野菜（タマネギ、夏秋ナス、キャベツ等）

①春どりタマネギ

- ・地床育苗の苗床予定圃場は排水対策を徹底し、最終播種期（極早生で9月20日、早生で9月25日頃）を考慮し、計画的な作業を行う。播種が遅れる場合は中晩生品種への変更も検討する。

②冬どりタマネギ

- ・定植用の畦ができていない圃場は、畦立てが速やかにできるよう、表面排水を徹底する。ただし、土壤水分が多い状態での耕起は絶対に行わない。可能であれば、乾燥が早い圃場に変更する。
- ・定植前に苗に液肥を施用して活着と初期生育を促進する。定植後も必要に応じた灌水を行い、活着を促進する。
- ・電照栽培が可能な場合は、定植時期が9月中旬まで遅れても栽培可能である。

※「シャルム」は10月中旬から30ルクス以上の照度で夜間3時間の電照が必要

③夏秋ナス等の果菜類

- ・共通対策②～⑤に同じ

④キャベツ、ブロッコリー、レタス等

- ・定植用の畦ができていない圃場は、畦立てが速やかにできるよう、表面排水を徹底する。ただし、土壤水分が多い状態での耕起は絶対に行わない。可能であれば乾燥が早

い圃場に変更する。

- ・キャベツ、ブロッコリーの定植時期が大幅に遅れる場合は、育苗中の苗（セル成型苗）に窒素追肥は行わず、灌水のみで管理することで機械定植が可能な苗の大きさを維持する（硬化苗）。この育苗法により、1 か月程度は定植時期の延長が可能となる。なお、定植時には活着と初期生育促進のため、苗に窒素成分を含む液肥追肥（OK-F-1 500 倍等）を行ってから定植する（かん注またはどぶ漬け）。
- ・育苗中の苗は適切な灌水管管理と換気（通気）を行い、軟弱な生育にしない。
- ・栽培中の圃場については、共通対策③、④に同じ。また、圃場の乾燥後に畦の崩れと明渠の点検・補修を行う。

⑤カンショ（サツマイモ）

- ・圃場内に滞水しないよう、徹底した排水対策を行う。
- ・収穫に期間を要するものについては、生育状況に応じて薬剤散布を行う。

IV. 花 き

1. 生育状況

（1）施設花き

キク、バラ、カーネーション、トルコギキョウ、鉢物、花苗などが栽培中である。

（2）露地花き

ホオズキは栽培終了、シンテツポウユリは栽培終了に近づいており、キクは定植時期もしくは生育期間中である。

2. 今後の対策

- （1）浸冠水が長時間続くと、根傷みや光合成の低下、呼吸量の増大による草勢の低下、疫病や軟腐病や立枯病等が多発しやすいため、ポンプ等により早期な排水を図る。
- （2）多雨による土砂のはね上がりや茎葉の傷み、土壌水分過多等は病害の発生を助長しやすいため、予防のため農薬を十分量散布する。
- （3）露地では、斑点細菌病や葉枯病、褐斑病等の病害が発生しやすいため、農薬散布による防除を行うとともに、病害が発生した葉や株は圃場外へ持ち出す。
- （4）多雨や浸冠水は、土壌養分の流亡が生じやすいので、葉面散布剤の散布を行って肥効の低下を防ぐ。
- （5）マルチを被覆している畦が浸冠水した場合、マルチ下が土壌水分過多となりやすいので、天候が回復した後、マルチを畦肩まで上げて畦の乾燥を促す。
- （6）施設栽培では、循環扇等による空気循環や換気を行い、通気性の向上を図るとともに、急激に天候が回復した場合、強光による葉焼けを防止するため、遮光資材のきめ細かな開閉に努める。

V. 果 樹

1. 生育状況

（1）カンキツ類

- ①露地カンキツ類は、果実肥大期である。
- ②露地みかんは、7月の乾燥傾向を受けて、糖度が平年より高く推移している。
- ③ハウスみかんは収穫のピークは過ぎており、加温時期の違いにより着色期～収穫期の園地がある。

(2) 落葉果樹類

- ①ナシの「幸水」は収穫終盤であり、トンネル「豊水」の収穫期である。露地ナシは果実肥大期である。
- ②トンネルブドウは、収穫後期である。
- ③カキ、キウイフルーツは、果実肥大期である。

2. 今後の対策

(1) 果樹全般

- ①土壤水分過多により根傷みを起こしやすい状況であるため、余剰水分の排除に努め、水田地帯などで浸冠水した圃場ではポンプ等で排水を行う。
- ②特に、浸冠水により根痛みが懸念される園では、大雨後に晴天が続くことによって、急激な蒸散量の変化による樹体のストレスが心配されるため、様子を見ながらこまめな灌水や葉水の施用を行う。

(2) ハウスみかん

- ①収穫前の園地では、浮皮の発生を抑制するため換気等によりハウス内の除湿に努める。また、果実腐敗防止のための薬剤防除を徹底し、果実を丁寧に取り扱う。
- ②夏季せん定園においては、夏枝の充実不足が懸念されるため、葉面散布等により充実促進を図る。

(3) 露地みかん

- ①園内外を巡回し、土壤流亡や土砂崩れが生じている場合は速やかに復旧するとともに、集排水溝の整備を行う。
- ②マルチ被覆園では、果実品質や水分ストレスの程度を観察し、晴天日にマルチを開放するなど水分ストレス付与に努める。
- ③多量の降雨や曇天に伴い、糖度上昇の鈍化や浮皮の発生が懸念されるため、樹勢が低下していない樹では品質向上のためフィガロン乳剤2,000～3,000倍の散布を行う。
- ④黒点病、褐色腐敗病等の病害の発生が予想されるため、防除を徹底する。

(4) 落葉果樹

- ①ナシやブドウでは、糖度の低下を防ぐため、新梢管理を徹底し、遅伸び防止と日照の確保に努める。また、施設内の余剰水の排水を行い、反射マルチ被覆で補光を行う。
- ②ブドウでは、裂果や脱粒の発生が多い場合、袋を外して除去を行い、腐敗果の発生を防ぐ。品質が上がりにくい場合には、着果調整を行う。
- ③ナシの黒星病やブドウのべと病など病害の発生が懸念されるため、雨の合間に防除を徹底する。

Ⅵ. 茶

1. 生育状況

三番茶収穫後、または枝条更新園では整枝後の再生芽生育期である。新芽での炭疽病を始めとした病害の発生が懸念される。

2. 今後の対策等

- (1) 圃場に停滞水が見られる場合は、応急的な排水溝等を設置し、速やかに園外に排水する。
- (2) 大雨による土壌流亡や土砂崩れが心配されるため、園内外を巡回し集排水溝を点検、整備する。土壌流亡や土砂崩れが生じた場合は速やかに復旧する。
- (3) 秋整枝後の葉層に残す予定の展開葉への病害防除を徹底する（特に炭疽病）。

Ⅶ. 畜産

1. 飼料作物の生育状況

生育状況は草種・品種により異なるが伸長期から収穫開始時期となっている。

2. 今後の対策等

(1) 飼料作物

- ①圃場の排水に努め、流入物、土砂などの除去を行う。
- ②飼料作物の発育不良や欠株が多い場合は、今後の成育や刈り取り時期までの期間を考慮して必要であれば追い播きや追肥（5 k g / 1 0 a）等の対策を行う。
- ③乾草やサイレージ等の飼料の変敗に注意し、冠水・カビなどにより変質した飼料は疾病等の原因となるので速やかに廃棄する。

(2) 畜舎等対策

- ①畜舎内へ浸水した場合、汚濁水の排水、土砂やゴミなど汚物の除去、消石灰の散布、消毒を行い、敷き料を交換するなどすみやかに快適な飼養環境を整える。
- ②井戸、飲水槽などへの汚水の侵入は、病気の発生源となるので、速やかに排水、清掃し、次亜塩素酸ソーダ、サラシ粉などで消毒する。また、断水に備え、飲用水などの確保は、水道の他、清浄な河川水などの利用も考えておく。
 - ・飲水量目安／日、乳牛：1 5 0 L、肥育牛6 0 L、豚3 0 L、鶏：1 L